

龍谷顕真会会報

も く じ

前門さまご遷化	1
2002 (平成14) 年度 総会・グラフ	2
2002 (平成14) 年度 会員活動報告	3~ 7
2002 (平成14) 年度 総会記念講演内容要旨	8~23
第10回海外視察レポート (カンボジア・タイ)	24~31
2002 (平成14) 年度 事業報告、会員動静	32



前門さまご遷化

「ご成婚50年」を迎えられた前門さま 1986 (昭和62) 年
～「宗報」2002 (平成14) 年7月号より掲載～

◇昨年 (平成十四年) 六月十四日午後一時十六分、本願寺第二十三代宗主勝如上人 (大谷光照前門さま) が満九十歳でご遷化になりました。

ご葬儀は同年七月十八日午後一時から総御堂でつとめられました。

ご一同と共に深く哀悼の意を表します。

◇前門さまにおかれましては、昭和四十九年四月二十五日、当会の発足にともない「龍谷顕真会」とご治定たまわり、今日までの礎をお築きいただきました。また、昭和五十二年、現・ご門主さまへ法統を継承されてからも、変わらぬご教導をたまわり、当会の歩みを常に見守り続けていただきました。

◇前門さまのお心を体し、当会員一人ひとりが僧侶としての間法につとめ、益々宗門の社会的実践活動に寄与していくよう取り組んで行きたいと思えます。

◇当会においては、第十回海外視察 (カンボジア・タイ) の日程が前門さまのご葬儀と重なりましたため、視察先タイのワット・ラシャプラナ寺院にて、ご葬儀同刻より調声人梅津正純氏のもと「勝如上人ご遷化にかかる追悼法要」をご修行いたしました。

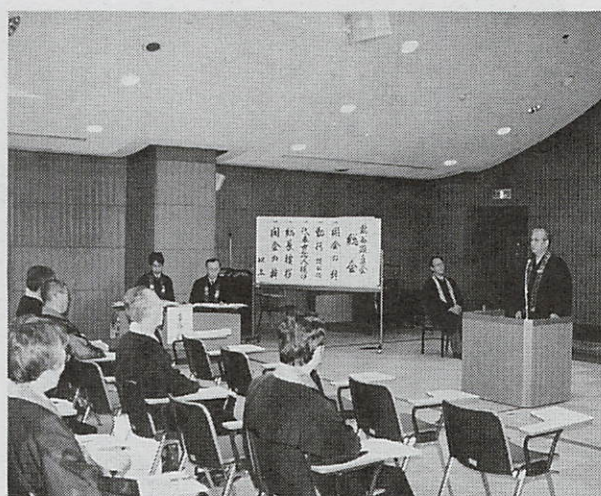


藤谷光信代表世話人挨拶

2002(平成14)年度 総会・グラフ



総 会



武野以徳総長挨拶



記 念 講 演



(講師 吉澤健吉氏)

2002(平成14)年度会員活動報告

会員四十三名のうち二十七名より「活動報告書」の提出がありました。
尚、無記入箇所は記載いたしておりません。

- ① 議会役職
- ② 所属委員会役職
- ③ 地域団体役職
- ④ 所属党派・役職
- ⑤ 本年度取り組み組んでいる事柄
- ⑥ 今後取り組みたい課題
- ⑦ 抱負・モットーなど

柴田 薫心
札幌市議・六期
北海道・札幌・宝流寺前住職

- ① 自民党評議員会顧問
- ② 総務委員会委員・国際特別委員会委員
- ③ 札幌市連合町内会顧問
- ④ 自民党札幌市支部連合会常任顧問

櫻田 正弘
北見市議・八期
北海道・北見東・本覚寺衆徒
① 議会議長

- ② 総務教育常任委員会
- ④ 自由民主党

萱森 眞雄
横手市議・三期
東北・秋田・専光寺衆徒

- ② 経済常任委員会副委員長
- ③ 老人ホーム 施設長
- ④ 自由民主党・財務委員長

花木 肇正
大島町議・六期
高岡・射水・称念寺住職

- ① 議会議長・市町村合併調査協議会座長
- ② 産業建設常任委員
- ③ 教区会議員

町国保審議委員会
町都市計画審議会委員
同農業振興協議会委員
④ 自由民主党大島町支部幹事長

嶋田 政憲
勝山市議・五期
福井・福井・本覚寺衆徒

井上 馨
勝山市議・一期
福井・円陵・嚴教寺衆徒

- ② 議会報編集特別委員会
建設企業委員会委員長
- ③ 勝山市荒土町壮年会事務局長
- ④ 無所属

中田 宗人
明宝村議・六期
岐阜・郡上・圓光寺住職

- ① 議会議長
- ② 総務・文教常任委員会委員

横山 善道
伊自良村議・二期
岐阜・黒野・金證寺住職

- ① 町村合併推進特別委員会委員長
- ② 産業建設常任委員会副委員長
- ③ 郡体育協会理事
- 郡交通安全協会伊自良支部長
山県テニス会長

富山県第三選挙区支部総務

④無所属

⑤山県郡合併問題

南北小学校統合同題

畜産環境問題

⑥教育（学校）

環境問題

東海・北陸自動車道「河合PA」の利活用

⑦小さいことへのこだわり

雪へのこだわり

創意工夫へのこだわり

①経済土木常任委員会委員長

議会運営委員会委員

④無所属

寺本 克磨

川越町議・一期

東海・朝明・法雲寺衆徒

大塚 泰雄

安曇川町議・一期

滋賀・高島・通安寺住職

松井 靖典

河合村長・三期

岐阜・飛騨・願教寺住職

①河合村長

②全国特別豪雪地帯岐阜県町村協議会会長

岐阜県山林協会副会長

岐阜県過疎地域自立促進協議会副会長

岐阜県雪対策協議会副会長

④無所属

⑤平成11年9月15日豪雨災害復旧工事の最終仕上げ

「環境立村」の宣言にともなうアクションプラ

ンの実施

個性ある山村地域再構築実験事業の推進

バラ栽培の推進

大雪対策、大雪対策（公共施設の雪冷房）推進

下水道整備

⑥道の駅、バラ公園の整備

「やまびこ館」利用促進のための農山村広場・

公園整備

利雪・親雪・支雪対策の推進

「環境立村」の推進

山田 真澄

東員町議・十一期

東海・員弁・浄源寺住職

①議会運営委員会委員

②教育・民生常任委員会委員長

議会だより編集委員会

都市計画審議会委員

町ごみ問題対策協議会

③社会福祉協議会理事

④無所属

⑤市町村合併全般について

介護保険制度の実施運営の実態と問題点

新学校学習指導要領の実施状況と問題点

老人施設の総合センター設置問題

⑥広域行政化と市・町合併についてどうまとめるか

行財政改革のための各種施策の立案等

⑦地方自治体として分権活動の行使について、改

革をモットーとして諸問題について具体的な改

善活動を推進したい

②総務民教常任委員会副委員長

町村合併検討特別委員会委員

基地対策特別委員会委員

③町国保運営協議会副会長

安曇川水系治山治水期成同盟会委員

総合交通体系審議会委員

公共下水道事業審議会委員

教区基幹運動推進委員会委員（研修部員）

高島組副組長（組相談員）

滋賀県高島郡仏教会幹事（事務局長）

福祉施設評議員

苦情解決委員会第三者委員

地区小学校評議員

地区小学校同窓会顧問

④無所属

⑤町村合併問題の推進

青少年健全育成教育・教育の実践

介護保険制度その他福祉問題の研究

町の危機管理体制の整備

湖西地域振興施策の研究・検討

⑥良識ある地方職員の仲間づくり

既成政党の枠組みに関係なく自由に動く
迷信の打破

自分自身の資質向上と住民の政治意識のレベル
アップ

その他前回報告事項と同じ(心の教育・高齢者
対策・迷信の打破・宗教教育)政教分離の原則
の追求(公明党、創価学会等)

⑦おとしよりに希望を! こどもに夢を! そし
てみんなに安心を!

安全・安心・安定の町づくり
口にはお念仏を、こころに仏さまを!(心に仏
を、口にはお念仏を!)

まじめに働くものが幸せになれる社会の実現
正直者を裏切らない政治の実行
お寺はこころの病院です!(苦しみ悩み110番活
動の展開)
真の僧侶に門信徒になろう!

北川 真道

秦荘町長・四期

滋賀・愛知上・浄甫寺住職

①秦荘町長

③滋賀県町村会会長

日本赤十字社滋賀支部副会長

近畿地方交通審議会特別委員

びわこ放送株式会社取締役

滋賀県公立学校施設整備期成会会長

滋賀県町村議会議員公災組合議長

④無所属

⑤温水プール建設

高齢者センター建設

中学校体育館改築

全域公共下水道完了に伴う水洗化率80%を目標

福祉の充実

社会教育生涯学習の充実

⑥身体障害者及び痴呆性老人のグループホームの建設

町村合併

⑦互いにふれあう元気なまちづくり

黒田 昭信

滋賀県議・三期

滋賀・犬上南・教得寺住職

①議会議長

②総務企業常任委員会

青少年少子高齢・女性対策特別委員会

③部落問題基本法制定要求国民運動彦根犬上地区

推進協議会会長

④自由民主党・県連副会長

⑤市町村合併・市町村財政

少子高齢化対策

⑥地域の発展(県下均等に)

⑦不言実行

和をもって貴しと為す

梅津 正純

山東町議・二期

滋賀・山東・寶安寺住職

②総務文教委員

山本 隆俊

茨木市議・一期

大阪・茨木東・称名寺住職

②建設水道常任委員会委員長

議会だより広報委員会委員長

波多 正文

尼崎市議

兵庫・阪神南・正光寺住職

谷川 正秀

尼崎市議・三期

兵庫・阪神西・万徳寺住職

藤本 和人

市川町議・二期

兵庫・神崎・妙楽寺住職

②文教厚生常任委員長

議会広報編集委員長

③中播シルバー人材センター理事

④無所属

⑤ごみ処理場(クリーンセンター)建設

ごみ最終処分場(埋立地)建設

ごみ減量化問題

⑥下水処理問題

人権問題

⑦念仏の心を政治に反映

小泉 玲子

御津町議・三期

兵庫・網干・浄泉寺衆徒

①議会運営委員会副委員長

②福祉厚生常任委員会委員長

③福祉センター理事・運営委員長

ボランティア運営委員長

国民健康保険運営委員

民生委員推薦委員

④無所属

窪田 享信

温泉津町議・三期

山陰・大家・願林寺住職

②総務委員会

④無所属

⑤自然で合理的な合併を実現する

⑦議会報告「共に通信」を定例会後発行して情報を提供する

「共に考え、共に学び、共に取り組み、共にぬくもりある町を」

竺川 紹隆

金城町議・五期

山陰・福屋・浄光寺住職

②総務常任委員会委員長

運営委員

④無所属

⑤合併問題

⑥合併問題

⑦政教、人権の問題

小原 美智子

美都町議・一期

山陰・三隅・妙蓮寺衆徒

藤谷 一剣

匹見町議・三期

山陰・益田・蓮長寺住職

藤谷 光信

山口県議・三期

山口・岩国・教蓮寺住職

②農林水産委員会委員

③山口県演劇協会会長

岩国市文化協会会長

④民主党県連副代表

⑤農林水産振興について

⑥市町村合併

文化行政の充実・振興

⑦称名報恩

熊谷 宗圓

岩国市議

山口・岩国・西福寺住職

米沢 痴達

徳山市議・一期

山口・熊濃・真光寺住職

島田 明

山口県議

山口・防府・善正寺住職

①議会副議長

弘中 正俊

防府市議・一期

山口・防府・乗円寺住職

久保 玄爾

防府市議・五期

山口・防府・信行寺住職

秋里 勝道

美東町議・五期

山口・美祢東・明楽寺住職

①議会副議長

②経済建設委員会

④無所属

川越 正信

美祢市議・一期
山口・美祢西・西音寺衆徒

志賀 信之

朝地町議
大分・岡・西蓮寺住職

片山 隆昭

豊浦町議・一期
山口・豊浦西・心光寺住職

傍示 暢昭

佐賀市議・一期
佐賀・巨瀬・正見寺住職

④無所属

⑤地方分校による合併問題

⑦合併問題による合理化

産業政策に対する在り方

井上 隆純

豊浦町議・一期
山口・豊浦西・正音寺住職

⑤児童相談所の充実

幼・保・小の連携

タウンモビリティ実現

⑥市において、街中でのカウンスリングルーム開設

荒木 行也

高田町議・四期
福岡・三門南・阿弥陀寺住職

①議長・副議長

②産建委員長・決算特別委員長・総務常任委員・文教常任委員

③瀬高町外二ヶ町衛生組合議会副議長・東山老人

ホーム議会議員・消防議会議員・葬斎組合議会議員

片山 正純

諫早市議・二期
長崎・諫早・明教寺住職

①議会運営委員会副委員長

②総務文教委員会

④自由民主党組織副委員長

⑤仮称「森林水源涵養税」設置

⑦義務が先、権利は後

谷川 通澄

大和町議・三期
福岡・三門北・至徳寺住職

隈部 弘正

菊鹿町長・二期
熊本・山鹿・光嚴寺住職

①菊鹿町長

④無所属

⑤人づくり事業

多目的体育館、保健福祉センター等

環境保全事業

⑥町のキャッチフレーズ「かがやきの郷きくか」

（自然がかがやき、一人ひとりの命がかがやくような町づくり施策）

⑦一住職の生きざまとして行政を通して、自信教人信の心をふまえながら、少しでも人々の幸せの歩みのかけ橋となれたらと願っている

長嶺 興也

中央町長・二期
熊本・益南・善林寺住職

崎田 要司

清武町議・五期
宮崎・宮崎・長明寺住職

椎葉 淨信

椎葉村議
宮崎・椎葉・稱専坊衆徒

現代社会と伝統仏教の課題

吉澤健吉

講師略歴

吉澤健吉(よしざわ・けんきち)

一九五〇年、東京都生まれ。七四年、横浜国立大学文学部哲学科(近代フランス哲学専攻)卒業。伝統仏教と京都学派の哲学を学ぶため、三任住んだ東京を離れ、単身京都へ。七四年、京都新聞社に入社。編集局企画報道部長、社会部長代理、編集局夕刊編集部長などを経て二〇〇〇年九月から現職。現在「大学コンソーシアム京都」学術コンソーシアム委員会研究委員、天台宗総合研究センター主任研究員など兼務。龍谷大学非常勤講師。宗教記者を長年つとめ「伝統宗教と現代」をテーマに、低迷する伝統宗教の活性化への道と、京都の伝統の智慧を現代にどう生かすかを研究している。また、二〇〇〇年の歴史を誇る京都の持つ伝統の蓄積を、二十一世紀にどう発信していくかをテーマに、宗教、大学、文化、産業を統合した「京都学」の構築を提唱している。この数年は、主に朝刊二面の年間企画の責任者を担当。九三年秋から約一年間にわたり、特別取材班キャップをつとめた朝刊一面連載企画「この世紀」通算一八〇回は、不安の時代に心の支えを求めて生きる人々の内面を粘り強く追った功績が認められ、九四年度新聞協会賞を受賞。九六年一月から同じく特別取材キャップを担当した朝刊一面年間企画「学問ルネサンス」は、大学都市・京都の抱える課題を過去から未来にわたって提示した功績が認められ、九六年度坂田記念ジャーナリズム賞を受賞した。九七年一月から十一月まで、朝刊一面連載企画「伝統新時代」を担当。九九年十一月からは、京都、滋賀の二世紀を振り返る年間連載企画「まちひと一〇〇年の肖像」のデスクをつとめた。本業以外にも、京都を代表する音楽家ワット・ヤマシタ氏の石の楽器サマカイトによる寺院コンサートのプロデューサーも手がけている。



皆様、こんにちは。今日は龍谷顕真会にお招きいただきましてありがとうございます。私ども、新聞社で仕事しております

と、あまり人前に出てこうやってしゃべることとは苦手でございまして、なるべく行かなくていいようにお断りをしているんですけれども、西本願寺さんには本当に長いことお世話になっておりまして、ご門主にも日ごろお世話になっておりますので、昨年十一月に築地あすなろ会にお招きいただきまして、東京を往復して来たんですけれども、それに引き続きまして、今回またご本山の方にお伺いしたわけでございます。

皆様に新聞をお渡ししておきましたけれども、

今日は北海道から南は佐賀県まで広い地域からお見えですので、おそらく京都新聞を知らない方がほとんどだと思います。北海道には北海道新聞という新聞社があります。兵庫県は神戸新聞、それから広島県は中国新聞、九州に行きますと西日本新聞というのがございますが、そういうところと同じような新聞を出しているというふうにお考えいただいたら結構でございます。日ごろから記事の交流とか、そういうものをさせていただいており、いずれも友好社でございまして、他にも信濃毎日新聞、新潟日報という地方の有力紙というのもございますが、そういう新聞社と同じ地方紙として私どもも仕事をさせていただいているわけでございます。

個人的なことでございますが、私自身はまった

く京都とご縁がございません。東京で生まれ育ちました。ちょうど東京のご真ん中の神田というところで、祖父の代からキリスト教で育ちました。祖父もキリスト教、父もキリスト教、私もキリスト教で、学校も東京の九段に暁星学園というフランスのマリア会という男子のミッション修道会が経営している小学校から高校までの一貫教育の学校がございまして、そこに入れられて、ほとんど西洋流の教育を受けて高校までやってまいりました。

大学に入りまして、その時に父の会社が会社整理をしているいろいろあったのですが、それまでキリスト教しか知らなかった私が、母親から哲学者梅原猛さんの中公新書の『地獄の思想』という本を与えられて、一回読んで「あらんない」というので読みました。ちょうど浄土教に現れたい



ろんな地獄の考え方を、地獄絵とか文学とかから分かり易く説いた本でございまして、それを読んで非常にショックを受けてまして、仏教の考え方を初めて知りました。当時はローマのバチカンに本山がありますカトリックという教団は排他的な教団でございまして、「仏教や神道は邪教である。同じキリスト教の内部にあるプロテスタントや聖公会も邪教だ」と教えられて育ってまいりまして、ほとんど仏教の知識に触れることはなかったんですが、そこで初めて仏教というものに触れて非常に興味を抱いて、梅原先生のご本を貪り読みました。『美と宗教の発見』とか、仏教美術に関する

もの、仏教思想に関する本を読んで、日本という国は非常に素晴らしい思想、宗教を持っている国なんだ、と遅まきながらそのころ、痛感したわけでございます。

そして、一度、著者の梅原先生に会ってみよう、と、まったく無謀ではあったんですが、今から三十数年前、大学三年のころに京都に参りました。東京駅の八重州口を午後十一時に発ちますと、こちらに朝の七時に着くドリーム号というバスがございまして、それに乗って京都にやってまいりまして、京都の左京区に北白川というところがございしますが、そこにある梅原先生のお家を訪ねました。梅原先生は当時、立命館大学をお辞めになられて、次の京都市立芸術大学に行かれるまでのちょうど浪人期間中でした。お宅にお邪魔しましたら、奥様がお出になられました、「お約束でございますか」と聞かれましたので、「いえ、違います。先生の本を読んで非常に感銘を受けたので、会いに来ました」というふうに申し上げましたら、奥様がおっしゃるに「お引き取りください」と。どこの誰か得体の知れない人間ですから、そう言われて当然です。帰ろうかなと思いましたが、運命というのはおもしろいものでございまして、「ワンワン」とコリーが吠える声がして、着物を着た梅原先生がちょうど散歩からお帰りになられて、「こいつは何者だ」というふうに奥様にお聞きになられ、奥様が「東京からあなたに会い

に来たけれど、約束じゃないんでもう帰ってもらおうと思ってるところです」と言いましたら、これが梅原猛さんのすごいところで、「まあ、上がりのなさい」と言って、居間でですね、お茶を飲みながら約二時間近く、当時先生が興味を持って研究しておられた梅原古代学の世界「隠された十字架」とか、「法隆寺論」とかですね、淡々とお話しいたいて、何を間違えられたか、「僕は弟子をとるのはちょっとまだ早いと思ってるから、東京に帰って西洋哲学の勉強をしっかりとしない」とおっしゃられました。ちょうど私もそのころ、たまたまミッシェンスクールでフランス語を小学校一年からずっとやっておりまして、大学では近代フランス哲学、デカルト、パスカル、ベルグソンなどを読んでおりまして、「自分もニーチェの研究やったら、西洋の哲学を勉強するのは基礎で大事だから、とりあえず東京へ帰って勉強しない」と言われまして、東京に帰りました。たまたま大学の就職課に京都新聞社という募集要項がありまして、京都に行って梅原先生の近くで仏教の勉強をしようと思ったら、新聞社に入ったら身近で話を聞けるだろうということで受けましたら、偶然受かりまして京都に来たわけでございます。京都新聞社にとっては、記者になりたいから入ったわけではないふつつかな記者なんですけれども、それから、はや二十八年が経ってしまいました。

京都というのは非常に特殊な地域でございますし、私も新聞記者の世界でも、全国になくて京都にしかない記者クラブというのが二つございます。一つは本願寺にあります京都宗教記者会で、これは日本で唯一の、宗教専門の記者クラブでございます。バチカンにありますバチカン国際記者会とならんで、世界にたった二つしかない宗教記者クラブです。なぜ、この記者クラブが京都にあるのかというと、日本の伝統仏教の本山のほとんどが京都にある。つまり、曹洞宗の越前永平寺と鶴見の総持寺の両本山、そして日蓮宗、日蓮正宗以外はほとんど京都に本山が集中している、ということから記者クラブがあるわけでございます。

もう一つは、京都大学にございます京大記者クラブで、これも全国に一つしかない大学記者クラブでございます。なぜ、京都にあるかといいますと、京都の市内に本部を置く大学は五十大学ございまして、全国の中でも大学の数が非常に多い。人口比が、今、京都市内百四十六万人なんですが、学生が十四万人おりますので、十人に一人が学生という、これまた石を投げれば学生にあたるという学生の街でございます。

それだけではない。戦後日本のノーベル賞受賞者湯川秀樹博士に始まりまして、福井謙一博士、田中耕一さんまで、歴代十二人いますけれど、このうち七人がほとんど京都大学出身、ないしは京都にゆかりの学者なんです。昔から、京大という

のは、東の官僚養成学校の東大に対しまして、反権力、自由の気風でならしてきた大学なんです。

特に湯川博士は敗戦後、打ち沈んでいた日本人に勇気と希望を与えてくれた星なわけですが、湯川先生が京都大学で中間子理論を研究され、それがノーベル賞を受賞したわけですが、そういう先生方のお家が京都にいっぱいあります。これを取材しなければいけないわけです。東京からこういう先生方は取材できませんので、ノーベル賞を取材するためにあるような記者クラブでございます。

毎年秋のノーベル賞シーズンになりますと、記者たちが、今年はいきたいこの先生がいけそうという先生方をノミネートいたします。特に、日本の場合、文学賞は川端康成さんがとりましたけれども、平和賞とか他はあまりご縁がなく、だいたい理科系が強いですね。ノーベル医学生理学賞、ノーベル化学賞、それからノーベル物理学賞、このへんで日本人がとります。今年は何々先生がいけそうだ、という情報があつて、その先生が九州で学会に出るとなると、京都の記者たちが、朝日、読売、毎日、NHK、京都新聞、中日新聞がこぞって九州の学会まで行きまして待機するわけですね。だいたいノーベル賞は毎日発表が続いていきますので、七時過ぎくらいになりますと、今年のノーベル賞は誰それというのがわかります。そして、当たればそこで取材しますし、だめな時は帰って来るということになるんです。共同通信

社とか全国紙といわれる記者も、最初に東京で採用されたり大阪で採用されて、どこの支局に行きたいかということ聞かれます。この時に一番人氣が京都支局なんです。京都支局で何をしたいのかというと、大学を担当したい、宗教を担当したいというようなことで、みなさん、こうやって京都を目指してくるわけです。それぐらい素晴らしい街なんですよ。

この宗教記者会に私も在籍しまして、その後デスクや部長をやりながら、宗教の問題に携わって来ましたが、宗教記者会の実際の記者たちの活動というのはだいたい三分の一くらいは年中行事です。新年が明けますと、西本願寺の報恩講に始まりまして、それから例えば降誕会、そして神道の行事ですけれども、五月の葵祭、七月になりますと祇園祭、八月になりますとお盆、お彼岸、秋になりますと平安神宮の時代祭というのがございまして、こういう行事をこなしますのが仕事のうちの三分の一くらいでございます。これだけをやっていますと「行事記者」といって馬鹿にされます。

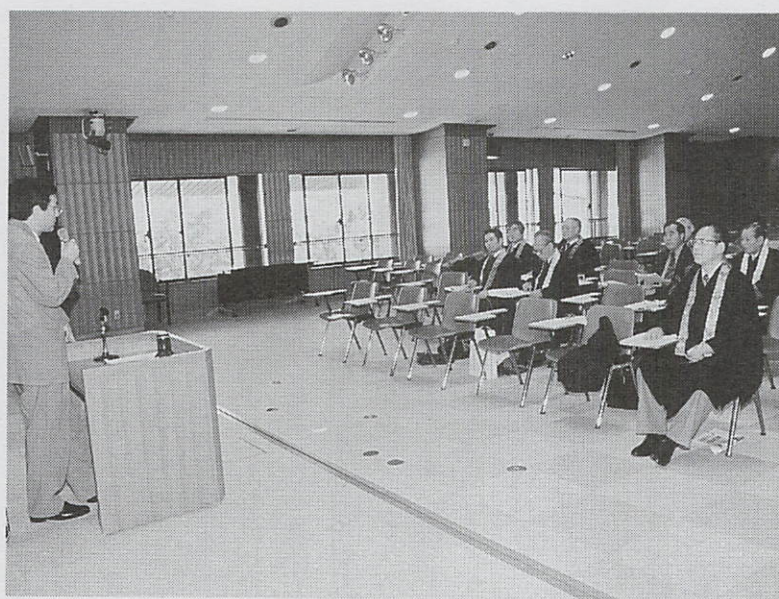
あとの三分の一くらいは、これは今の伝統仏教教団の問題点でもあるんですが、事件と訴訟です。西本願寺がついにこの間、北山別院問題で揉めましたが、やはり一番大きな問題は東本願寺紛争でした。そして大覚寺紛争、醍醐寺紛争、いろいろな紛争がございましたけれども、だいたい信心の間

題というよりは金の問題、土地の問題、そうした世俗にまみれたどろどろの部分で、司直の手がのびたり、裁判になったりしますので、これが私どもも宗教記者の仕事の一つでもございました。これはよくないですね。事件が裁判になりますと新聞に載ります。それが一般の人に伝統仏教への悪いイメージを与える。坊さん、何やっとんだ、ということ、非常に悪いイメージを与える。我々もできたら書きたくないんですけども、問題が起きて明るみになった以上は、各社追いかけますので書かないわけにはいきません。

そして、残りの三分の一は、各新聞社が持っている宗教のページでございます。朝日新聞ですと「こころのページ」、私どもの新聞ですと、「宗教・こころ」というようなページを持っておりまして、これはいわゆる宗教記者の本領発揮の部分でございます。いまして、管長さんにインタビューしたり、今の伝統宗教がどんな課題をかかえているのか、ビハラの問題がかつてありましたし、靖国の問題ですとか、最近ですとアフガンの問題だとかイスラムの問題、こういうものをとり扱っていくということとを仕事としているわけです。私ども京都新聞社の場合は京都に本社がございますし、京都を拠点に、東京、大阪、そして滋賀県、京都府内の各都市に支社・支局を置いていて、宗教を担当しても最低三年ぐらいはやるようにしてありますが、全国紙の場合は早い方で一年、長い方でたまに三年

ぐらい、だいたい宗教をかじったところで終わってしまう、というのが実情です。

私の場合、非常に幸運、ラッキーでしたのは、偶然わかったことなんです。西本願寺のご門主と、大学時代の恩師が一緒でございました。大学は違うんですが、当時、東京大学に木村清孝先生という方がいらしまして、去年定年退職されましたが、ちょうどご門主が大学院で華嚴の研究をされて、大学院修士課程の修士論文を書か



れていた時の指導教官です。その時に、木村先生がたまたま私の横浜の大学にも非常勤講師でいらっしゃっていてインド哲学を教えていらっしゃった。私も梅原猛さんに触発されて、専攻のフランス哲学もさることながら、印哲の講義に一生懸命出てたんですね。講義後、木村先生とお茶を飲んだりして、そのころは、自分は西本願寺の新門さまを教えているんだということは木村先生はおっしゃらなかったんで知らなかったんですが、たまたま京都に来てこの仕事を始めてから、木村先生から実は僕の弟子に大谷光真ご門主がいるということをお聞きいたしました。それからご門主と非常に親しくさせていただくようになりました。

たまに、ご門主と一緒に昼ご飯を食べたり、雑談をしたりする機会があるんですが、私から見ると、西のご門主というのはすばらしいなあ、いつも思うんです。貴族的な特権意識のまったくないご門主なんです。宗教教団のトップとか教主という立場にありますと、多少はカリスマ性とか、ありがたいなあという部分があった方がいいなあと思うんですけども、ご門主は地味すぎるくらい地味でございます。そういう部分がない。これも笑い話でございますけれども、ご長男が法政大学に合格されたときに、ご門主が息子さんと二人で東京の下宿を探しに回られたんですね。京都でそんなことしたら大変ことになるんですけども、東京の方というのは西本願寺をご存じない。知っ

ていても築地本願寺が本山の伝統仏教教団というくらの感覚なんですね。で、ご門主が下宿屋さんを回りながら見ると、「宗教お断り」という紙が貼ってありまして、これはだいたいオウム真理教とか、怪しい宗教の学生とかが入ってくると、

大家が困りますんで、「宗教お断り」というように書いてあるんですが、気に入ったマンションがあって、「実は私の家は西本願寺なんですけれどもかまわないでしょうか」とご門主がたずねたら、不動産屋の主人が「西本願寺は宗教じゃないからいいですよ」と言ったというんです。笑い話でございしますが、まさにこの感覚ですね、東京というのは。先日も総長と話していたら、これも笑い話ですけれど、千葉の方で開教センターを開こうというんで、話が出たら、地元が西本願寺ってこの新興宗教だと言って反対したっていうんですね。西本願寺、本願寺教団というのはだいたい関西、西日本に強い教団なんですね。東京、東北、北海道の方では知られていないというのがよく分かるような逸話なんですけれども。笑いながらそんな話をご門主としたりします。ご門主はじつは大の外車嫌いでございまして、ある門徒の方が、宗会議員の一部の方が外車で本山に来られるのに、ご門主が国産車じゃみっともないので、外車を買ってほしいと多額の寄付をされたんですが、私は絶対外車は嫌だという。ぎりぎりの線、トヨタセルシオで妥協いたしましたして、セルシオをお買いにな

られたんですけれども、それでお出かけになられることは少なく、お出かけになるときは公共の市バスに乗られたり地下鉄に乗られたり、非常に公私の別をはっきりつけられる方でございます。

我々からすれば、どこでご門主がそんな庶民派の心情を持たれたのかということが、いつも不思議だったんです。しかし、ご門主の生き方を拝見していると、一つには故大谷光照前門さまが大谷光端さまのいろいろ大変だった姿を見て、自分の息子にそうなるのもうらたてはいいけないと心に留められて、戦後すべて大谷家の財産を宗門に寄贈して、自分たちは宗門から給料をいただく身でいいんだというふうに大転換されたということ。それに、ちょうど大谷ご門主が育たれたとき、東本願寺が紛争をやっております、それがご門主の胸に刻まれて、今のパーソナリティを作られたのかな、という気がいたします。今のご門主がご健在な限りは、本願寺教団はおかしな方向に行かないというふうにご門主は思っております。

ただ、私も前から見ていて、伝統仏教教団はたくさんありますけれども、真宗教団の命というのは何かと言いますと、やはり親鸞聖人の血筋を受け継ぐ大谷家なんですね。他の教団を見ますと、だいたい管長さんというのは選挙で選びます。普通の人が選挙で挙がってくるわけですから、お金のやりとりですとか醜い面もあって、社会の批判



をかうわけなんですけれども、大谷家の場合は必ずこの親鸞聖人の血統を継いだ人しか継げないわけございまして、ご門主を選ぶにあたっての争いというのは、ほとんどないわけでございますから、やはり、全国の門徒の心の支えとしての大谷家というのは、時代が変わっても大事にしていかなないと真宗教団というのは維持できないというふうに思います。

私どもは一般紙という部類でございまして、京

都には宗教専門紙というのもございますが、朝日、読売、毎日、日経、産経と一緒に、宗教だけを取材するというわけではございません。当然、宗教以外にも政治、経済、社会、文化、いろんな分野を担当してくるわけなんです。最近、原稿を見ながら感じるのは、一番の問題は政治家の倫理性の欠如の問題じゃないでしょうか。国民から選ばれた国や地方の議員さんたち、特に今問題になっている国会議員や秘書がいろんな問題を起こして司直の手にかかる。秘書が逮捕されるということ、は、我々の常識でしたら公設秘書なわけですから、やはりご自分の部下の責任は上司が取るといって党をお辞めになるだけじゃなくて、議員辞職されるのが当たり前だと思うんですけども、最近の議員さんたちの記者会見を見ていると、「俺は悪くないんだ」とか、「秘書が悪いので俺は悪くないんだけれども、国民が言うから辞めます」というようなことでお辞めになられる方がいる。そんなことで一般国民の信頼が崩れかねないのか、というのが残念なことでございます。それでは、追求する野党の方はいいのかと言いますと、野党もだめだ。そして、野党議員も自分から辞めるとは言わなかった。党首から説得されてようやく辞めた。これで果たして国民の選良である議員が務まるのかなと。ここで、もう一度我々日本人の道徳というのを考え直さないと、この国家はだめになっていくんじゃないかなというのが最近の

強い実感でございます。

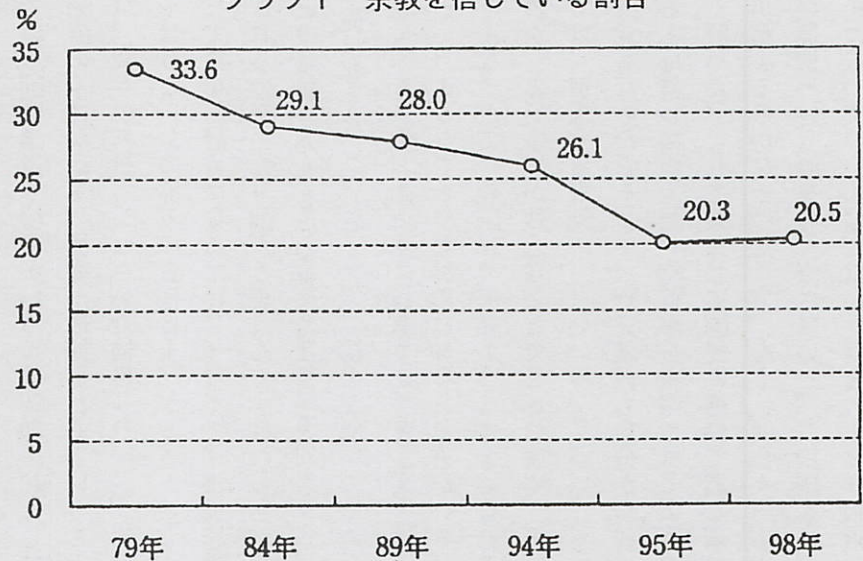
日本人の道徳の基礎になるものは一体何なんだろうということをよく考えるんですが、やはり世界から見たら日本というのは仏教国なんです。神道の信者がどれくらい多いと言いましても、やはり世界から見た日本は仏教国日本なんです。特に、その仏教の中でも何百年にも渡って日本人の心の支えとなってきた伝統仏教がすっかりしてくれないと、今の道徳的な退廃に対して歯止めがからないということを感じいたします。それなら伝統仏教教団が政治家、国民の心の支えとしてきちんとリーダーシップを発揮しているかというところ、これはまた問題があって、その役割を果たしていないんじゃないかなと。一番困るのは、お寺を継いでいるご住職方、ほとんどのご住職はみんなまじめに一生懸命やっておられるんですが、ご住職方の中に信心を持たずに、要するに職業として父親、祖父さんの代からやってきたからやむを得ず住職を継がなきゃいけないんだということで、職業としてお寺さんを継いでらっしゃるご住職がいるような気がしてならないんですね。本当にご住職に信心がないのに、そのご住職の生き方や法話を聞いて門徒さんがついてくるわけがないのでございまして、こういう現象が今のこの世襲制の一つの悪い部分として出てきているんじゃないかという気がいたします。

例えば、そういう意味で言いますと、今日皆様

に資料をお配りしたんですけれども、現代社会が伝統仏教をどういうふうに見ているかという部分で資料一を最初ご覧いただきたいんです。これは文部省の宗教年鑑から拾いました仏教の全国の信者数なんです。ちょうど一九七六年ですから、約二十五年前、この時に仏教系信者数というのは八三三万人おりました。それが、それから二十五年経ちますと、五七六万人。三千万人も大幅に仏教の信者が減っているわけでございます。これがおそらく二十一世紀半ばになりますと、今の一億二千万近い人口が八千万くらいに減ってくる。もう少し経ったら六千万まで減ってしまう。こういう中で仏教系の信者数というのは確保できるのかどうか。これは実数に現れた非常に厳しい現実だというふうに思います。

資料の二ページ目をちょっとご覧いただきたいんですが、これは読売新聞社が調査しております世論調査でして、国民の「宗教を信じていますか」という調査でございます。終戦直後の一九五二年には、四六パーセントくらいの方が、宗教を信じていると答えていたのが、二十年前の一九七九年になると、三人に一人に減ります。そして、現在は二〇・五パーセント、五人に一人に減っております。そして、「宗教は大切ですか」という質問に対して、約二十年前は二人に一人の方が「大事だ」というふうに答えていたのが、最近になりますと、三人に一人に減っております。では若者た

グラフ1 宗教を信じている割合

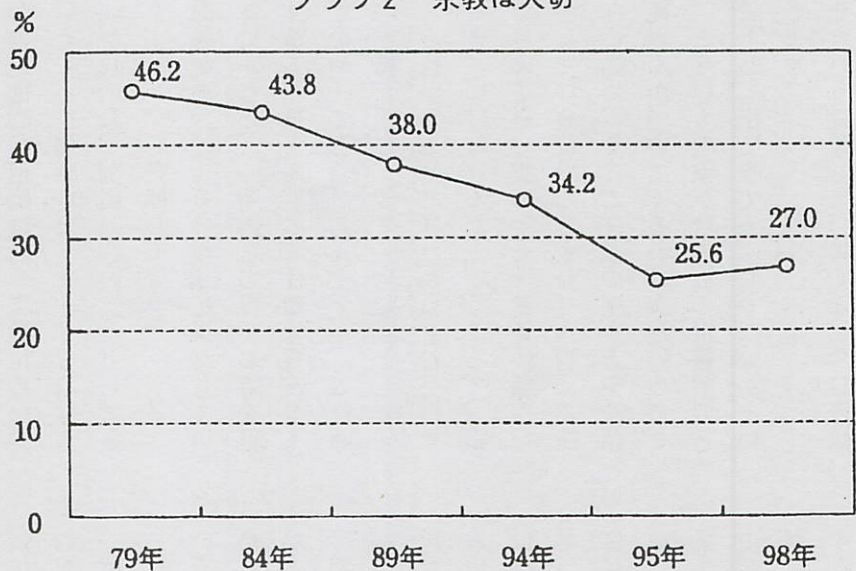


ちはどういうふうを考えているのかということな
 んですが、三ページ目をご覧いただきたのですが、
 これは国学院大学の日本文化研究所の調査ですが、
 全国の四千人の学生に対するアンケートで「宗教
 に関心がありますか」ということに対して、今か
 ら十年前は約半分の四六・九パーセントが「関心
 がある」というふうに答えているんですが、今に

☆読売新聞調査

1952年 宗教を信じている 64.7パーセント
 心から信じている 52.5パーセント

グラフ2 宗教は大切

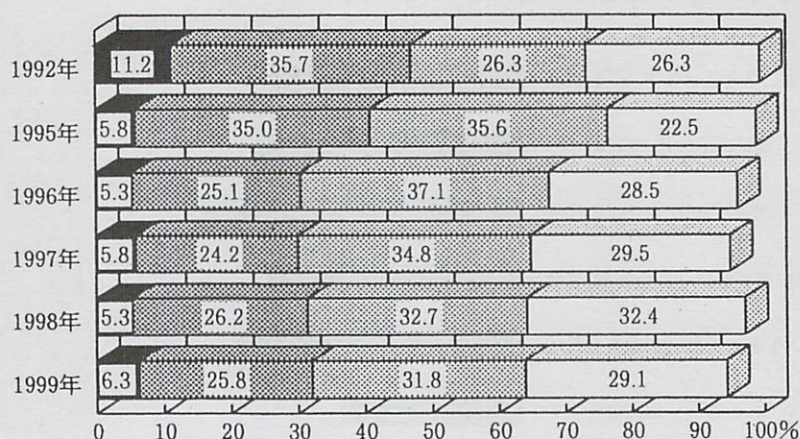


なりますと、三三・一パーセントまで減ってしまっ
 ている。そして、「神仏霊魂の存在を信じていま
 すか」という質問では、神・仏を信じている人は
 約半分くらい、霊魂の存在は六〇パーセントが信
 じてる。
 この霊魂というのは今、若者の間で流行ってお
 ります安倍清明というのがおりまして、平安時代

の陰陽師安倍清明のカルト的な部分なん
 です。京都の一条戻り橋にいる魍魎
 魍魎の式神というのを操って、この陰明師
 が悪神を退治していくというストーリー
 なんです。これが小説化され、コミッ
 ク漫画になったとたん全国的なヒットを
 呼んで、京都の清明神社というのがあり
 まして、ついこのあいだまでは本当に貧
 しい神社で、どうやって食べているんだ
 ろうかと思うような神社が、今では、毎
 日三〇〇人以上の若い女性がつめかけま
 して見事、社殿を改築して非常にきれい
 な神社に変わってしまいました。これく
 らい今、若い人たちの間で霊とか霊魂に
 関する興味がありまして、これがこの六〇
 パーセントという数字に現れているんじや
 ないかなという気がいたします。

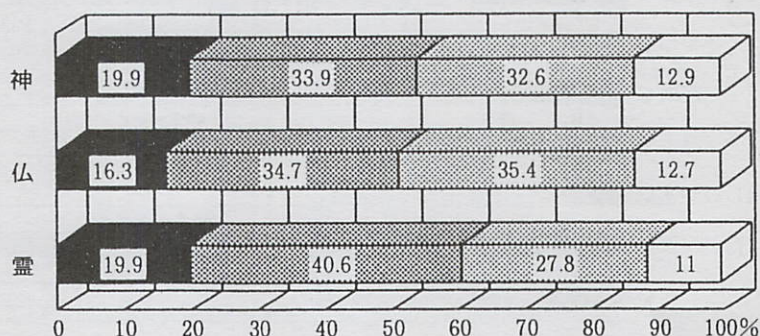
資料の四ページ目は、宗教とはまった
 く関係のない第一生命ライフデザイン研
 究所というところが行った調査で、「生活
 者と寺の関わり―檀家制度と寺の今日的課題」と
 いうタイトルの調査でございす。これは皆様の
 ご門徒の主力世代になります六〇歳以上の全国
 に居住している既婚の男女六〇〇人を対象に行っ
 た調査です。「寺にどんな活動をやって欲しいか」
 とか「寺のイメージ」とか、「寺は自分にとって
 どんな存在か」というようなことを質問している

グラフ3 宗教への関心



■ 信仰あり：「現在信仰をもっている」
 ■ 関心あり：「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」
 ■ あまりなし：「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」
 □ まったくなし：「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」

グラフ4 神・仏・霊魂の存在



■ ++ : 信じる
 ■ + : ありうる
 ■ - : あまり信じない
 □ -- : 否定する

☆「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクト（1995年から）
 國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクト（1990年から）
 1992年 全国32大学 4005人にアンケート

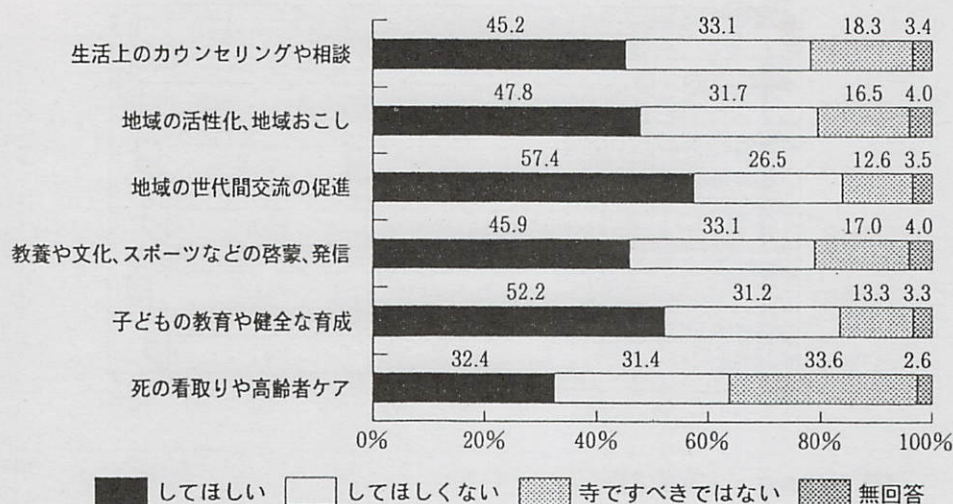
調査なんです、このペーパーに出てこない質問でやはり問題なのは、菩提寺があると答えている約五七パーセントの方に「自分の代で檀家になったのはどれくらいですか」と聞くと、二七パーセントくらいしかない。ほとんどの方々は祖父母ないしは、それ以前からその寺の檀家だから今も

檀家をやっていると答えている。つまり、新しい檀家の開拓がほとんど今の伝統仏教教団は出来ていないというのが数字で現れている。そして、菩提寺との付き合いの頻度なんです、ほとんど付き合いがなくて、葬式・法事の時しかないという人が四〇パーセント近くいる。

た問題でございまして、一体どうしたらよいのか。そして、ご住職方に聞いている「寺の将来に対する危機感」という質問もございまして、「檀家の減少、お布施の減少、葬儀・法事の減少というのが現在起きている」と答えている方が六割以上いるのに対し、「そういうことは起きる可能性はな

次に、「お葬式の希望のスタイル」というのを聞いているんですが、「仏教でやりたい」という方が「菩提寺がある」と答えたうちの六二・五パーセント。つまり、菩提寺があっても仏教でやらないという人が四〇パーセントくらいいるということですね。「菩提寺がない」と答えた方の中で「仏教でやりたい」という方が三四パーセントいる。これは、檀家寺・菩提寺はないけども、仏教徒の自覚はある、皆さんの世界で言う首都圏の「離郷門徒」だと思えます。皆さん、葬儀屋さんに頼んで何か仏式を取り入れてやるんでしょけれども、菩提寺はないということとなんてね。困ったことに「葬式が必要ない、宗教色はいらない」というのが菩提寺のある方の中で二六パーセントある。これは困っ

図1 【地域の寺がおこなう活動について】



【資料】
「生活者と寺との関わり」
～檀家制度と寺の今日的役割～
《発行》
株式会社 ライフデザイン社
〈調査時期〉
1999年11月
〈調査対象者〉
60才以上の全国に居住する
既婚男女600名
(ライフデザイン研究所
生活者モニターより抽出)
〈調査方法〉
郵送法
〈有効回収数〉
580名
(男性291名・女性289名)

図2 【寺のイメージ】

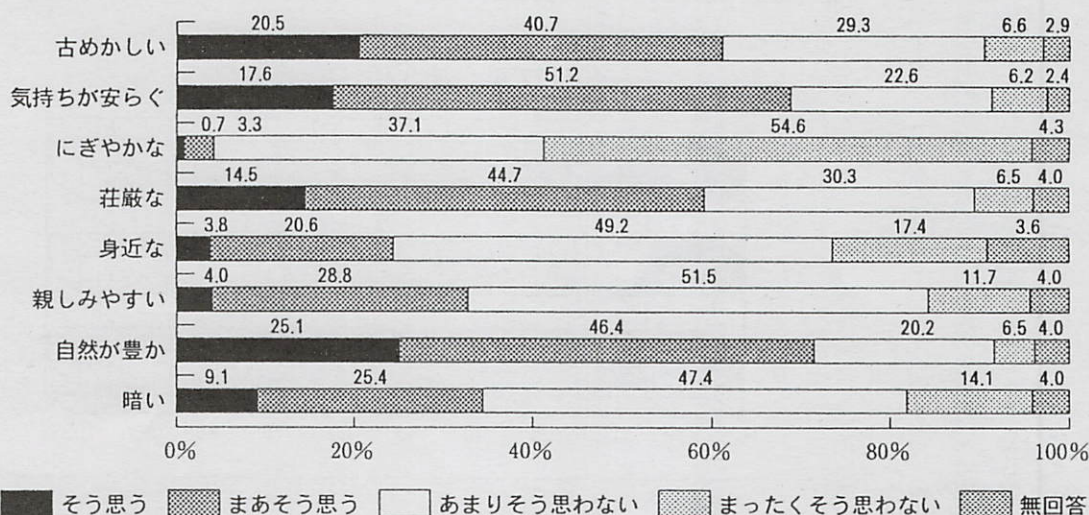
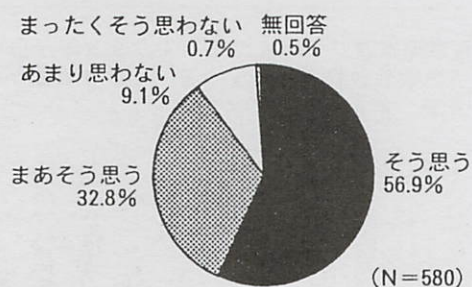


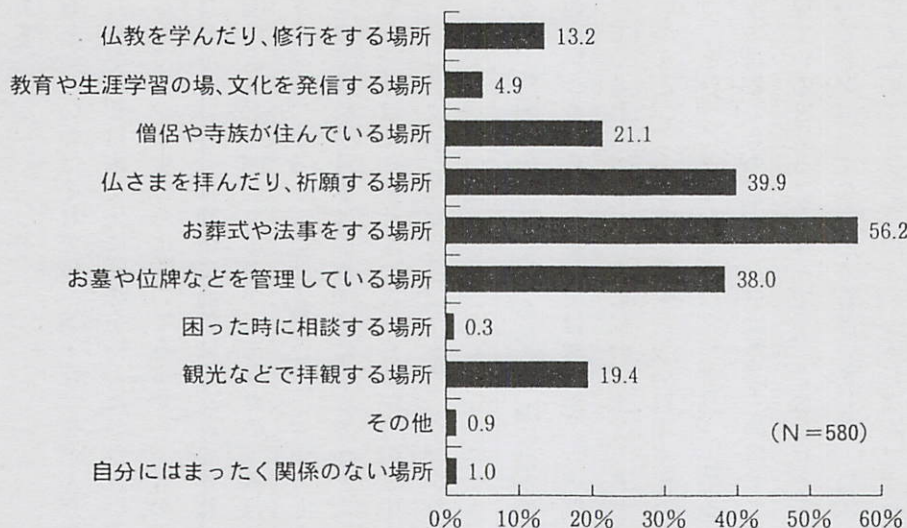
図3 【寺は本来、檀家や信者以外にも、
広く地域に開かれた場であるべきだ】



「寺は本来、檀家や信者以外にも、
 広く地域に開かれた場であるべきだ」
 に対する回答は、56.9%が「そう思う」、
 32.8%が「まあそう思う」、9.1%が「
 あまり思わない」、0.7%が「まったく
 そう思わない」、0.5%が無回答と
 なりました。この結果から、寺はも
 ともと地域に開かれた場であるべき
 であることがうかがえます。

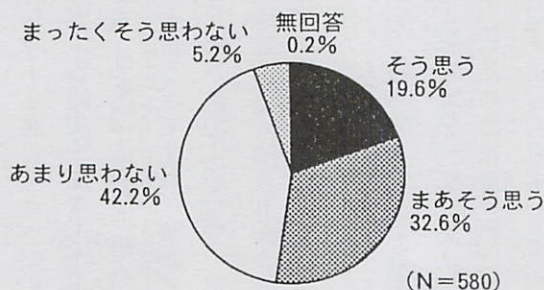
この第一生命の調査のまとめのところに
 出てくるんですが、檀家の菩提寺への
 帰属意識が非常に薄らいでいて、寺の
 経済的基盤が非常に弱体化の危機にあ
 るという状況を嘆いております。そし
 て、図6をご覧いただきたいのですが、
 「住職、宗派、本尊の知名度」とい
 う調査がございまして、この中で「お
 宅の宗派は何ですか」という質問に「
 西本願寺です」と答える人は九〇パー
 セントくらいいるんです。ところが、「
 ご住職のお名前は何か」と聞きますと、
 六〇パーセントの方しか答えられない。
 そして、「ご本尊は何ですか」と言いま
 すと、五三パーセントしか答えられな
 い。これはどういうことかと言いますと、

図4 【寺は自分にとってどんな場所か】 (2つまで選択)



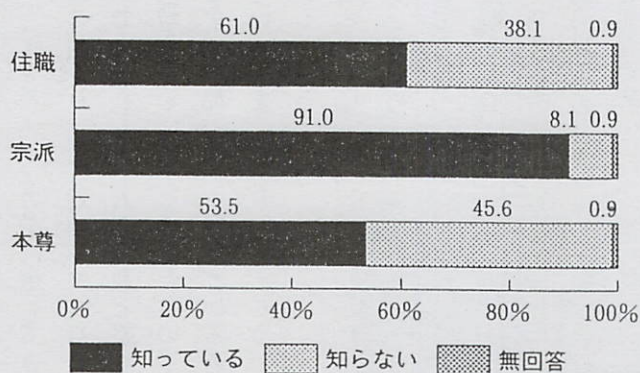
家が必ずしも仏教の信者じゃない。そして、宗派に関する教義的な知識もないということなんです。つまり、信者とは限らない檀家に経済基盤を依拠している今の檀家寺の存在、これは一歩日本を出まして、よその国のキリスト教や他の国から見ますと、非常に異質な存在だということなんです。

図5 【現代社会において寺が果たす役割は大きい】



こういう一つの厳しい現実というのを認識いただく一つのサンプルとして、この調査を今日は持ってきて参りました。それでは伝統仏教は本当にだめなのか、そして、これから何か伝統仏教が伸びていく、開教していくようなヒントはないのか、ということでございます。資料をご覧いただきたいのですが、京都に大学コンソーシアムというのがございまして、京都の五十の大学が提携いたしまして、一つの連合体を作っております。京都駅前に大きなビ

図6 【住職、宗派、本尊の知名度】



ルを建てて、他大学の授業をここで受けられるという、単位にもなるという全国でも珍しいケースなんです。約三〇〇科目の科目がございまして、これをいろんな大学の学生が受講するわけです。そのベスト五〇がこの表なんです。トップの人氣が「人と文化―禅―」なんです。花園大学という禅宗の大学ですが、花園大の「人と文化―禅―」の定員七十人に対して六百近い応募がある。大学コンソーシアムがこの単位互換を始めまして、これこれ十年くらいになるんですけど、ずっと

今若い人たちは非常に禅とかに興味がある。そして、第二位の「日本文化における花・茶・香」(池坊短期大学)というのがあるんですが、この科目もずっとこの人氣を保っていて、定員九〇人に対して五七九人、八倍くらいの倍率があるんです。つまり、この五〇科目の中で約一〇科目くらい「梵字と曼荼羅」とか、「座禅入門」とか、こういう日本文化、そして、仏教に関する関心が今の若い人たちの中に高いわけござ

います。

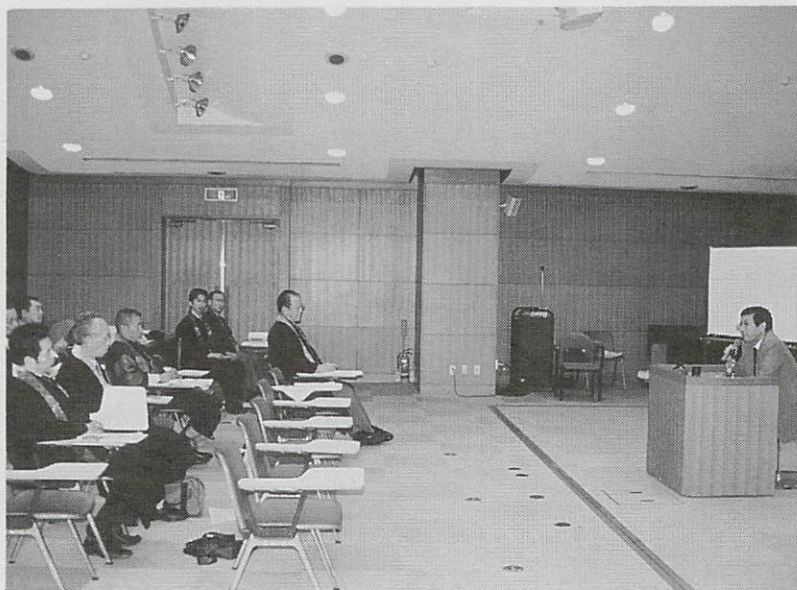
おもしろいのはそれでは「茶・花」を選んだ学生たちがなぜ日本文化に興味を持ったのかという点なんです。学生たちに聞いてみますと、今の学生たちというのは簡単に海外に行くんですね。

外国の人に必ず聞かれるのが「あなたの宗教は何ですか」と。すると、「無宗教です」と言うしかないんですね。日本は仏教国ではないのかと言われても「私は知りません」と言うのが今の学生たち。「あなたの国の文化は何ですか」と聞かれても「知りません」と答えるしかないんですね。ところが、外国人から見たら「あなたの国には茶道・華道といった文化があるのではないか？」と聞いてくるわけです。日本に帰って来て、これではいかんということで、学生たちが日本文化にとびつくということなんです。つまり、伝統文化、仏教に対して今の若い人たちは外国人の目でこれを見ているということなんです。これは私どもにとってもショックなことだと思います、日本もここまで来てしまったかという感じなんです。

おもしろい話なんです、私の友人にお茶の武者小路千家の家元がおりまして、彼が今、聖母女学院短期大学で教えているんですが、学生を家元の茶室、官休庵に連れてきて茶室にあげて体験させてあげたわけですね。そうしたら、若い女子学生たちがいつまでたっても茶室から出てこない。家元が覗きに行きまして、「君ら、どうしたんだ」

と聞きましたら、呆然として中で座っている。彼らが言うには「私たちは生まれてこのかた闇と蛍光灯の世界しか知らないで育ったんです。こうやって陽が障子を通して入ってくる。このほの明かりの世界（谷崎潤一郎なんかが愛した世界ですけれども）、日本的な世界に初めて触れて感動しました」と言うんですね。確かにそうなんです。京都をはじめ、各地に建つ今の日本の建築というのを見ますと、どんどん和室が無くなっていく。ほとんどがフローリングの板の間で暮らしておりまして、そこにガラス窓が付いていてカーテンを閉めるという暮らしをしておりますから、とても障子から明かりが入ってくるというような経験が都会の子どもたちにはないわけです。おそらく、今日お見えになられている顕真会のご住職方は地方からいらっしゃってますから、まだこんな世界はうそやろというふうに思われるかと思うんですが、都会の子どもたちというのは本当にそんなものでございまして、すっかり伝統から離れてしまっている。

そして、この座禅人気もどうしてこんなに人気があるのかと言いますと、ただ単に座禅を組むだけではだめなんです。ただ単に座学で禅文化とはこんなもんですと解説するだけでもだめなんです。要するに、座学と座禅をうまく組み合わせ、行と学をうまく組み合わせ若者に提示することによって、若者たちはおもしろいなと言って乗ってくる。これが不思議なところでございまして、ただ真宗教団、特に本願寺は残念だと思うのは本願寺教団というのはやはり「行」というものを否定してきてますので、この種の若者たちに対するアプローチが弱い。座禅というのは、オウム真理教と誤解されやすい部分があって、入ってくる人たちの半分は座禅をやって宙に浮こうなんて思っている方もおられるかもしれない。それにしても、こういう伝統的な一つの行というものが



若い人たをを引き付けているというのは、無視できないという気がいたします。

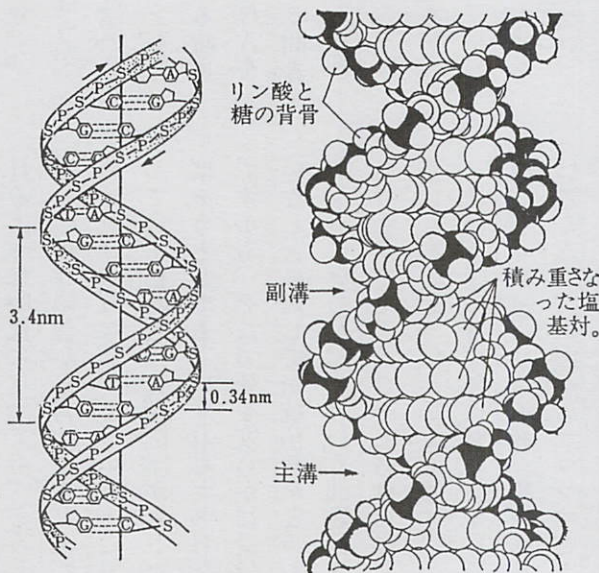
また興味深いことに、伝統仏教の知恵が現代に発信される時に、それが本当に古いものなのかという点必ずしもそうではないということなんです。

例えば今、エコロジーということがしきりに言われます。自然を大切にしよう、今日は議員さんのご住職が多いので、地元でも地球に優しいとかエコロジーとかいう話が出ると思うんですけども、これなんか西洋から入ってきたように思いますが、これなんかちですが、実際そうなんだろうかと、うふうに思います。例えば、教学は違いますけれども、比叡山の天台宗あたりは「草木国土悉皆成仏」というようなことを言います。これは天台本覚論という天台の教学ですが、一方、「涅槃経」の中には、「一切衆生悉有仏性」というのが出てきます。そして、道元の「正法眼蔵」には「大地有情同時成仏」というのが出てきます。これは漢字こそ違いますが、言っていることは全部一緒でございまして、草や木や、そして、土にもですね、仏性がある。生きとし生けるものには全部仏性がある。そして、これは無機質、そして、有機物、生きてるものにも、生きてないものにも全部仏性になる一つの仏性があるという考え方でございまして、これは言うなれば、自然や動物、すべて仏さんなんだと。人間というのはその中の一つ

なんだということを日本仏教はこれまで説いているというふうに思うんです。

私どもの育ったキリスト教の世界はそうではございません。「旧約聖書」の世界というのは「神がいて、人がいて、自然がある」という世界なんです。つまり、神がいて、自分に似せたものとして人を創ったと。そして、この自然というのは物質なんです。西洋近代哲学の祖と言われるフランスのデカルトが言ったのは「人間というのは精神を持った考える存在である。自然というのはただの物体なんだ」と。だから、人間は尊い。よって自然を加工して支配する近代な科学が発達していったらいいじゃないかと言ったのがデカルトです。日本も明治以来、西洋文明を採り入れて自然を改造してきましたから、その結果いろんな問題が起きた。公害問題が起きた。そして、今、エコロジーとか自然保護とか言っている。自然保護という発想は、人が自然を管理して、この自然を守らなきゃいけないという上から下を見下ろした発想。ところが、我々が受け継いできた精神風土というのは自然も人も一体であって、その中に仏性が宿っているという精神風土なんです。このように若い人たちに説明すると、少しは分かってくれるということなんです。

そして、もう一つおもしろいのが、今、分子生物学という分野がありまして、京都大学にも専門の学者がたくさんおります。この資料で見ますと、最後の九ページをご覧ください。この資料で見ますと、分子生物学がどんどん発達してきて、どういう世界に到達したかということなんです。人間の細胞というのがございます。皮膚とか人間の体の中には全部細胞がございまして、細胞の中に核というのが一つ入っている。これは皆さんも中学、高校の生物でお習いになっておられると思いますが、核の中に染色体が入っている。XY染色体とXX染色体というのがございます。これを拡大してみると、この上の写真のようになります。これをさら



DNA二重らせん (左: Gardner ら 1981)
左図では糖(S)、リン酸(P)、塩基(A, T, G, C)の配置を模式的に示す。右図ではDNAを構成する各原子がどのように配置しているかを、かなり実際に近く示してある。
柳田充弘「DNA学のおすすめ」

に電子顕微鏡で拡大しますと、この下にあるような二重の螺旋形になっている。これは何を言っているかということなんです。分子生物学が発見したものは、DNAの二重螺旋の構造というのは私も人間も動物もウィルスもこの世に存在するものは全部、この二重螺旋構造で出来ているということ。違うのは、梯子段の数だけだということなんです。人間が五〇億個の梯子段を持っている、ウィルスは二〇万個の梯子段を持っている。これだけの違いなんで、あとは、いのちは全部一つであるということを含め、分子生物学が発見したわけでございます。そして、下の左の方の図にある階段の上に遺伝子情報が乗っかっている。これが人類が地球上に誕生してから今までの情報が全部この上に乗っているわけです。それを全部記憶していたら、大変なことになりますから、そうならないように調節遺伝子というのが働いて、今、我々が生きていく上で必要な情報しかそこから出さないように作用しているわけでございます。

このDNAという、生命の設計図と言われるものが、この螺旋階段があるから人間の細胞が鼻になったり、耳になったり、目になったりする。動物がミミズになったり、ウィルスになったりするわけでございます。分子生物学が行き当たった一つが「いのちは一つであり、遺伝子は螺旋階段で出来上がっている」ということ。そして、もう一つは、生命というのは太古の昔からずっと一本の

いのちの糸で結ばれているということなんです。

仏教で言いますと、輪廻転生と言うのでしょうか、いのちの一つの長い一本の糸というのが先端の分子生物学の世界で今、証明されたということなんです。私は京大の研究者と付き合っている時に言うのは、「それでは、この螺旋階段、DNAを創ったのは誰なのですか」ということをよく聞きます。そうしますと、先生方が言うのは、「それを吉澤さんは神とか仏だとか言いたいんだろうけれども、それを言ってしまうと我々の商売あがったりだ」と。だから、自然の力とかですね、サムシンググレートとかですね、そういう言い方で学者たちは言っているんです。先端科学が進んでいった先で不可思議な世界にぶつかってしまった。そして、その結論が仏教が説いてきたことと合致しているように思えます。歴史というのはおもしろいものでして、一見古そうな智慧が実は真理を突いていて、西洋近代科学が遠回りして延々とやってきた末にたどり着いた結論が実は、仏教の教えと似たような部分があったというようなことも出てきていると思います。

いろいろ長々と申して参りまして、他にも例えば、臨終の問題とか、看取りの問題とかまだまだ伝統仏教にこれから頑張ってもらわなければならぬ問題があります。やはり生老病死というのはどれだけ科学が発達しても、これほどパソコンやインターネットが普及して、世界は一つだと言わ

れるような時代になっても、どうしても避けられない。釈尊の昔から言ってきた人間の宿命というのは避けられない。そういうところで、やがて死んでいく私たち、先端医学がどれだけのちを延ばそうとしても、いずれ私たちは死んでいくわけですから、そこで死を安らかに受け止めていくということに対して伝統仏教がどうしていかなければならないのか、そういう問題もまだまだ残っておりますので、ぜひとも皆様に頑張っていたきたいなあという気がいたします。

私は教団の外部にはおりますけれども、心では、いつも「本籍キリスト教、現住所仏教」と言っているぐらい、本願寺のファンでございまして、一千万門徒を抱える本願寺が頑張ってくれないと、日本の仏教はだめなんです。日本には他にもいろいろな宗派ありますけれども圧倒的に多いのが西本願寺でございますから、本願寺のお坊さんたちにここで頑張っていて、息子さんやお孫さんの代にみ仏の教えを延々と繋いでいただけるように奮起していただきたいことを申し上げます。どうもありがとうございます。

司会

ありがとうございます。若干、時間が過ぎます。せっかくの機会ですので、ご講師にご質問

などありましたらお願いいたします。

質問

先生のお立場並びに視点から現在の本願寺教団を見て、今後どのようなようになっていくと思われますか。また、どうしていくべきだと思われますかお聞かせください。

吉澤

今のご質問でございますが、私は外部の人間でございますし、宗教の評論家でもございませんので、お答えできるような立場にはないんですが、私どもから見て、悲観的な見方なんですが、おそらく二十一世紀に入りまして、あと五十年も経たないうちに伝統仏教のお寺の中で、自然淘汰^{とうた}がどんどん進んでいくのは避けられない事実でございます。現実には無住の寺院はどんどん増えているわけでございますし、武野総局が東京開教に頑張っているらしいんですけども、これも難しい課題でございます。どんな寺院が生き残っていくかと言いますと、やはりパワーのあるご住職、地域で信望の厚いご住職、こういう方々のお寺は残っていきますが、それ以外のお寺はおそらく今の五十代、六十代以上の方が亡くなっていったら、先細りしてだめになっていくだろうということなんです。そして、京都の場合で見ますと、京都でおそらく残るのは、本山は非常に規模を縮小して小

さな本山としては残るでしょう。観光寺院は観光収入というのは依然としてございますから、金閣、銀閣とか拝観収入で成り立っているところは、これは残ると思います。しかし、壊滅的な打撃を受けるのは、地方の末寺でございます。それも例えば西本願寺が強い安芸教区とか特定の教区は別として、それ以外の教区ではおそらく先細りで末寺は消滅していくだろう。

それでは二十一世紀の半ばに何が残るのかということになるんですが、仏教の教えだけではないかという気がいたします。非常に厳しい言い方ですが、親鸞聖人の教え、真宗の教えというのは人びとの心から心へ、親から子へ伝わっていくと思うんですけれども、お寺自体はもう存在意義がなくなってしまうって、どんどん減っていく。私どもがいつも申し上げるのは、やはりそうなって欲しくないから、今、離郷門徒がたくさんいる東京の開教に力を入れて、東京の離郷門徒が新興宗教に流れていかないようにしていただきたいということなんです。私どもが新興宗教のいろんな幹部の方と付き合いますと、皆さんおっしゃるのは、会員さんはほとんどどこかの伝統仏教の門徒さん、檀家さんなんです。西本願寺は非常に多い。東本願寺も多い。そういう人びとが離郷門徒になることによって新しい宗教に流れていく。なかには法華経や古い教典をいただいて、精力的に布教している新興宗教もございまして、そういうところ

にどんどん流れていくんですね。これを皆さんが本腰になって食い止めて、本願寺の地方の門徒の息子が東京に行ってふらふらしていたら、引きずり戻す大胆な改革がない限り今申し上げたような現象はもう止められないということなんです。これは伝統仏教の各教団みんなに共通しております。臨済宗も、浄土宗も一緒です。浄土宗あたりは家庭にお仏壇をという運動を起こされていますけれども、本心に今、本腰を入れて宗門改革しないと、次の代になった時にはもうどうしようもない、今さら取り返しがつかないということになってしまおうと思います。

質問

今世紀中ごろに、は浄土真宗は非常に厳しい立場に立たされると先生が指摘されましたが、私も今行動を起こさないといけないと思っています。また、現在行っている活動だけでなく、新しい視点から見た活動として音楽法要やインターネットを活用するなど、若者達とも一緒に活動をしていける場を作ろうと思っています。

先生の視点から見て、他にどういった活動方法があるか、ご意見がございましたら教えてください。

吉澤

ご住職がおっしゃられた現代教化ですが、例えば

ば大阪というのは全国的に見ても、おもしろい地区でございまして、私どもも浄土宗の大阪教区に行きまして、お話をいたしますと、ご住職のパワーがすごいんですね。お年寄りのご住職に結構パワーがございまして、前も大阪に参りまして、お話した後にご質問があって、吉澤先生のご説はごもっともですけれども、うちは檀家が増えていくというふうに言われまして、どうしてですかとお聞きしたら、いろんな活動をお寺でしておられる。すると日蓮宗が合わなくて戻ってきたとか、創価学会員だったけれども浄土宗に宗旨替えしたいという人が集まってきたと。やはり、これはご住職の人柄なんですね。もう一つ、今日は詳しく申し上げませんが、教化する場合に難しいのは、宗教というのは理屈抜きで単純にありたいという部分がなければならぬ。しかし、本願寺は教学が難し過ぎるため、宗教のありがたさというものを感ずることが非常に難しく思われます。

今の若いご住職で、京都の法然院のご住職とか、大阪の応典院のご住職は、お寺を毎日の演劇に開放したり、コンサートをやったりしているんですけど、そこで、ご住職が突然、浄土宗の教えを説いても若者は聞いてくれないと思うんです。むしろ、お寺というものがまず自分にとって身近なものになって、いつも出てくるご住職が一体何者えているんだろう、どんな信心持っているんだろう

うと、若者の方から関心持ってきますから、その時点でこちらからボールを投げてやるということが大事なのでございます。それには本願寺さんだけで頑張っているのではなくて、法然院や応典院などとネットワークを組んで、若い人たちに対処していくのも一つの方法だと思います。そういうことをぜひなさってください。くれぐれも注意していただきたいのは、インターネットというのは、あくまでバーチャルの世界でございまして、お寺に來た時のお香の匂いとか、なんとも言えないこのお堂の雰囲気とか、そういうものは伝わりません。やはり信心というのは五感から入ってくるようにしないと駄目ですので、やはり生の体験はしてもらおうということを基本に置いて、ネットも活用していくというのが一番の方法だと思います。

質問

レジュメに記載されている、「老後と仏教」「うつまん延(女性の十人に一人)」について、もう少し詳しくお聞かせください。

吉澤

本日は時間がないので、駆け足になってしまいました。その辺は省略させていただきますけれども、第二の人生、定年退職して、これからどうしているのかという方々の中に仏教に関心を持たれた方が多い。なぜかと言いますと、日本は明治時代か

ら和魂洋才^{わこんようさい}でやってきた。戦後、日本はアメリカの真似をしてきた。ところが、日本人である自分のアイデンティティを失っていることに、戦後五十年経って気がつき始めている。戦後はマルキシズム全盛期で、ヨーロッパの真似をした時代はよかったんですけど、熟年層の方々が今、日本文化の伝統仏教に関心を持たれているんですね。先ほども資料にお渡ししたなかにある京都学。私どもも、大学コンソーシアム京都の企画委員というのをやっておりまして、去年の秋、宗教、伝統産業など十五回の講座に、定員二百人に対して、関西一円から申し込みがあって、十五回全部満員になったしまったんですね。こういう方々が求めているのが、特に仏教が多いんですね。西本願寺に中央仏教学院というのがございまして、仏教を普通に学ぶコースと僧侶になるコースと二つございしますが、この仏教を学ぶコースの方に弁護士、新聞記者、お医者さんとか、いろんな方々が学びに来られる。ところが、そこしかないんですね。私どものOB記者も宗教記者を経験して成長したからと、本願寺中央仏教学院に入って僧侶になった方も現実におられるんです。こういう方に対するアプローチの場合が今の伝統仏教にはあまりに少なすぎる。

今のご住職方が見ているのは、自分の寺のご門徒であり、檀家でしかない。一般大衆を見ていないから、そういうことになる。こういう取り組み



をぜひともお寺でしていただきたいんです。熟年を迎えますと、定年後あと二十年生きなきゃいけないわけですから、六十からあと二十年間どうやって生きようかという時に、やはり心の支えが欲しい。日本人である以上、それは仏教である。仏教の中で何がいいかということで悩んでおられるわけですから、そういう方々の受け皿をやっぱりきちっと作って欲しいということです。あと今日は時間がなくて話しませんでした、臨終の問題で

すね。臨終の時をどのようにして真宗はお迎えするのか。患者さんが死んでいく時に、お浄土にかえていくんだというような、心の安らぎを与える場というのを、ときちゃんと一般に対してアピールしていく。今のようなクローズな、ご門徒や檀家しか相手にしていない状態では先細りする一方です。一般衆生にしてみたら、不安なわけですね。無宗教とか、散骨とかいってもやはり不安なんです。どこにかえていくのか分からないのは、その辺に対するアプローチをやはりきちんと出来ないかなと思います。

あともう一つ、鬱病の問題です。これも今日は時間がなくて省略しましたけれど、私も実は家内が八年ほど前に鬱病になりました。四人目の子どもを産んでから苦労したんですけれども、これは戦争中とか、高度経済成長期には起こらなかった病気なんです。現代医学で説明されている部分では、脳の中の間脳というところからある特殊な物質が出るんですね。それによってやる気がなくなってしまうという病気で、放っておきますと自殺してしまう方も多いです。特にまじめで、几帳面^{めん}で、これはここに置いておかないと気が済まないという方がかかるんです。この鬱病が今、表面に出てこないんですね。私もも友人の精神科医と話をしていると、精神科は大盛況なんですね。小児科は少子化で減っているんですが、精神科は非常に増えている。どんな人が来るかというと、

昼間は主婦、夜は学校の教師と会社員ですね。まじめな方々は、今のこういう時代の中で、だんだん生きる目的を失っている。そして、主婦の場合は過労ですね。核家族で赤ちゃんの子育てを教えにくる人がいない。自分で悩まながらやっているうちに落ち込んでいくんです。学校の教師は、まじめな人ほど学校に行ったら子どもが言うことを聞かない、保護者からは責められると。どうしたらいいのかと一人で悩んでいる。こういう人たちが今、増えているわけでありまして、社会の表面には出てこない。こういう人たちにとって、まずは精神科に行けば一番よいんですが、その手前です。宗教者が出来る役割がある。お寺が安らぎの場になるんですね。鬱病の人に対して「頑張れ」というのは死に等しいわけでございまして、頑張りたいけれども頑張れないからなる病気なので、自分で自殺に追い込んでしまう。心を病んだ人たちが昼間ぼんやりとお寺に来て、縁側でひなたぼっこしていたら、坊主さんやご住職がふらりとやってきて、にこっと笑っておられる、これだけで彼らには癒しになるんです。決して専門的なカウンセリングをやる必要はないわけで、どうかしましたかと相手の悩みを聞いてあげて一緒に涙を流す、それだけでもものすごく大きな癒しになるんです。

日 程

期 日	現地時間	内 容	地 名
7月15日 (月)	9:45	団員集合	関 西 空 港
	10:30	結団式(空港内控室)	
	11:45	関西空港発	バ ン コ ク
	15:45	バンコク空港着	
	18:30	バンコク空港発	
7月16日 (火)	19:30	シェムリアップ空港着 ホテルへ移動	シェムリアップ
	20:30	夕食(宿泊ホテル) シェムリアップ泊	
	8:00	朝食(宿泊ホテル)	シェムリアップ
	8:50	ホテル発	
	9:00	「JESUIT SERVICE」視察	
	15:00	昼食(宿泊ホテル)、休憩 アンコール・ワット視察	
	17:00	プノン・パケンの丘からの夕陽観賞	
7月17日 (水)	19:30	夕食(宿泊ホテル) シェムリアップ泊	シェムリアップ
	5:30	アンコール・ワットからの日の出観賞	
	8:30	アンコール・トム遺跡群視察	
	15:00	昼食(宿泊ホテル)、休憩 「ARTISANS D'ANGKOR」視察	
	16:30	シェムリアップ空港へ移動	
7月18日 (木)	18:45	シェムリアップ空港発	バ ン コ ク
	19:45	バンコク空港着	
	20:30	夕食(市内レストラン)	
	22:00	宿泊ホテル着 バンコク泊	
	8:40	朝食(宿泊ホテル)	バ ン コ ク
7月19日 (金)	9:00	ホテル発	
	10:30	「ワット・アルン(暁の寺)」視察 本願寺第23代宗主勝如上人 ご遷化にかかる追悼法要	
	11:15	「王宮」・「エメラルド寺院」視察	
	12:30	昼食(市内レストラン)	
	14:00	市内にてショッピング(自由行動)	
7月19日 (金)	18:45	宿泊ホテル着	関 西 空 港
	19:30	夕食(市内レストラン)	
	21:00	バンコク空港へ移動	
	23:59	バンコク空港発	
	7:20	関西空港着	
7月19日 (金)	8:00	空港内にて解散式	

龍谷顕真会

第10回海外視察

期 日 2002(平成14)年
7月15日(月) ~ 7月19日(金)

視察先 カンボジア・タイ

参加者 25名

第10回 海外視察レポート (カンボジア・タイ)

タイの寺院で前門さまを偲ぶ

龍谷顕真会代表世話人 藤谷 光 信

このたびの龍谷顕真会の海外視察はカンボジア・タイということに決まって、団員一同、期待と不安を持ちながら実行した。

不安というのは、カンボジアは長年の内乱で国民生活も貧窮しているのではないか、また地雷除去のことなどいろいろと先入観があった。

期待は、言うまでもなくアンコール・ワットとワット・アルン（暁の寺）、エメラルド寺院など有する仏教国の視察参拝である。

関西空港では、結団式のあと本山広報部の富永慎秀事務局長に見送られて出発した。午前十一時四十五分に関西空港を出発して、十五時四十五分バンコク空港に到着。そこで乗り継ぎをして、カンボジアのシェムリアップ空港に十九時三十分に着後、専用バスでホテルへ直行した。

シェムリアップ空港は、検査が厳しく入国手続

きにも手間取る。

目立つ建物はホテルばかりである。われわれの宿泊場所はソフィテル・ロイヤル・アンコール。木造二階建ての超デラックスホテル、庭も広く池やプールなど考えられない贅沢な物である。ホテルのメイド・ボーイなどもよく訓練がされており、英語や片言の日本語で対応してくれた。掃除などは現地の人々が黙々と仕事をしている。食事は、バイキング形式でデラックスなものがある。

翌朝、専用バスで午



第10回 海外視察 ワット・アルン（暁の寺）前にて

前九時に出発をして、ジェスイット・サービス (JESUIT SERVICE) を訪問した。ジェスイットという名称から、たぶんキリスト教系の支援団体と思われる。

ここは、地雷で足を失われた方を支援するNGOの施設である。センターは、小さな事務所があり、建物有二、三棟あり畑もある。両足を失われた方が出てきて、堪能な英語の説明を受けた。特にここでは、足が不自由な方への三輪車の製造が行われており、その過程を見せてもらった。カンボジアには地雷による身体障害者が多数おり、その人たちが支援するのがこれからの大きな課題である。

視察後、休憩を挟んで、いよいよアンコール・ワットは緑深いジャングルの中に忽然と姿を現す。大仏教遺跡で、その壮大な規模といい、建築技術といい、千年前の人びとの信仰の篤さが伺われる。視察中、小雨にみまわれたが、多くの観光客に混じって、中をつぶさに見学させてもらった。見学者一同、深い感銘を受けた。

地元の人びとは人なつこく、遠くからわれわれ観光客を見ている。アンコール・ワット遺跡の周囲を大きな運河が取り巻いており、規模の大きさと輪郭の壮大さは大変なものである。

このような仏教遺跡は、このジャングルの中に

まだまだ眠っているということである。

夕刻、希望者はプノン・パケンの丘から夕日の観賞に出掛けた。夕食はホテル内のレストランで取った。ロビーでは、現地の民族舞踊 (アラダンス) が演奏され、私達の旅情をなぐさめてくれた。独特のカンボジアの楽器による演奏、手や足の指を使い、体中で表現する古典ダンスは、異国カンボジアの心にしみる思い出である。

翌日、バスでアンコール・トム遺跡を視察した。遺跡の中に南国の木が茂り根や枝が巻き付いて異様な雰囲気である。こういった遺跡が、まだ発見されずに無数にジャングルの中に点在されていると聞いた。

午後、アンチザンダンカー伝統工芸品製作者養成学校を見学した。木彫や粘土細工などで仏像を造り、主に観光客向けに販売しているが、本来はカンボジアの仏像などの修復技術者を養成するものであろう。

午後六時四十五分、シェムリアップ空港からバンコク空港へ飛んだ。バンコクでは、コカレストランという、タイスキ専門店で、タイ風しゃぶしゃぶ料理を食べた。海鮮料理でフウフウ言いながらおいしくいただいた。

ホテルは、ル・ロイヤル・メリディアンという

五ツ星ホテルである。翌日午前九時にホテルを出発し、「ワット・アルン (暁の寺)」を視察した。バンコク一の壮大な寺院で観光客で賑わっていた。十時三十分から近くの「ワット・ラシャプラナ」という寺院を借りて、京都の本願寺にてご修行となる前門さまのご葬儀と合わせて、我々もその寺で追悼法要をご修行させていただいた。調声は梅津先生、法話は柴田先生にお願ひした。讃仏偈の読経の声、尊い法話など、感銘深い時を過ごした。

その後、「王宮」「エメラルド寺院」などを視察した。市内のレストランで飲茶をいただき、午後はそれぞれ自由行動でショッピングの時間を持った。夕食は、リバーサイドという海鮮料理の専門店で、旅の安全を祝って杯をかたむけた。

午後十一時ごろ、バンコクを出発し、翌朝七時二十分関西空港に到着した。菅原課長、楠書記の迎えを受け解散式を行い、全員無事に帰途に着いた。

合掌で迎えてくれる人びと

柴田 薫 心

タイは数回訪れているので、印象はスカイトレインが新設されたぐらいであったが、相変わらず日本人の観光客が多いのと、日本車が高い比率を示している。日本とタイは本当に近い国という印象を受けた。

さて、カンボジアであるが、首都には行かなかった。そこで全てを知るのは出来ないが、永い間の内戦の後遺症が多く残っていることに驚きと、そして多くの国民が未だ犠牲者となっている姿を目の当たりに見た。即ち、地雷によるためである。

日本より五十年以上遅れている。電気の通電は途切れ、いつ通電されるかわからないため冷蔵庫も昔の水を入れた冷蔵庫の方が役に立つとか、ランプ・ローソクの生活は、村々では、普通のものであります。

シエムリアップから車で三十分程の所にある JESUIT SERVICE の施設を視察した。

地雷で両足を失った方々に三輪車を造り、寄与したり、牛、野菜等を出荷しておりました。

暑い国ですから大変ですが、日本でも三輪車を贈る運動（富山県善興寺）をしているわけですが、

日本の車は立派ですが、スチール製で壊れても修理ができないし、チューブが入っているのでパンクしても修理ができないとのこと、鉄製でノーチューブがよいということでした。舗装もされていない道路ですから無理からぬことです。現地を調査しよく見て、私も協力したいと思いました。

彫刻・塗り物・織物等の学校を視察しましたが、一生懸命に学んでいる学生さん。先生に指導されたら一つひとつを丹念に作り上げていく立派な作品が展示され、即売もしておりました。

彫刻は、仏像が多く仏教国という印象を強くもちました。

世界の遺産アンコール・ワットは、想像のつかないくらいスケールで二百ヘクタールの中に点在しておりました。寺院の遺跡ですが、入場料の高いのには、驚きました。二回で四十ドルです。国の物価水準からすると、国民は入場できないと考えられますが、外国人は、特別料金なのでしょう。

七月十八日午前十一時、タイの寺院で前門さまの葬儀にあわせて追悼の一座が企画されておまして有り難く思いました。

私は、初めての顕真会の視察参加でしたが、タイもカンボジアも九割近くが仏教信者ということ

で、どこに行っても合掌して迎えてくれる姿に、私も見習わなければならないと心に刻み帰宅いたしました。

合掌



勝如上人ご遷化にかかる追悼法要（ワット・ラジャプラナ寺院で）

大勢の子どもたちがわんさと

小泉 玲子

第十回龍谷顕真会の海外視察は、カンボジア・タイ五日間の旅であった。

この会に入れていただいたおかげで、思えば随分各国の異文化に触れさせていただいたものがある。

今回の日程は七月十五日～十九日で、メインはアンコール・ワット遺跡の視察である。バンコクでバンコクエア・ウェイズに乗り換え、午後七時にカンボジアのシェムリアップに着いた。もう、辺りは日も沈み真っ暗で、空港の灯りも薄暗く周りの風景は定かではなかった。折しも雨期のため直前にスコールがあったのか、空港ロビー（とはいいたい待合所）に行くまでには、所々水たまりができ、歩くのに苦労しながらロビーに入り荷物を待った。荷物カウンターは、手動で七～八メートルくらいのローラーに滑り台のような台の上を五～六人もの係員が次々と荷物を転ばしていくのには驚いた。ようやく受け取って、次は空港前に来ている専用車まで個人個人で運ばなければなら

ない。その通路たるや砂利が敷き詰めてあり、なかなか思うように荷物が動かない。

私たちを乗せた専用車は一路ホテルへと向かった。車のライトも薄暗く辺りの景色はほとんどわからないが、所々これはホテルですとかホテルの建設中ですとかガイドの説明を受けるが、人影らしきものはなく、真っ暗な荒野の中をガタゴトと車は走り続けた。途中テント張り裸電球がぶら下がっている民家のようなものが二、三軒あったが、ビアガーデンだと彼は言った。

本当にこの先にホテルがあるのだろうか、どんな所に行くのだろうかと一抹の不安も隠せなかった。突如として真新しい光あふれるソフィテル・ロイヤル・アンコールホテルが目前に現れた。今までの景色との大きなギャップに夢を見ているようなリッチさを覚えた。

翌十六日午前中は、JESUIT SERVICEという施設を訪問した。ここはNGOの援助を受けている施設で、今もなお地雷で苦しむ人達や貧困の方々へ車いすや食料などを支援している施設である。

施設といっても本当にお粗末なもので、広い草原にボツンボツンと倉庫のような建物や、ここを拠点に支援活動を行っているようだ。ここで働く人は十人ほどで（本日は二人、他の人は地方へ支援に出かけている）月給は七十ドル～八十ドル（日本円にして一万円弱）であるが、彼らは、ソ



地雷で足を失った人びとへの三輪車造りを見学

ルジャーオブゴッド（神の兵隊）だと思って働いているといった。

今なお、タイの国境あたりには、地雷が多くあり、それを掘り起こす作業も支援しているようだ。皮肉なもので元ポルポト派であった人達も、自分が埋めたものを掘り起こしているとか。ここで働く中心的なサレットさんも足を地雷で失った方である。サレットさんは、体は不自由であるが、車



アンコール王朝の壮大さに驚きと壮厳さを感じる

いすを巧妙な手つきで組み立てている。

施設内の粗末な農場で育てた野菜・果物・放牧されている牛なども地方への支援物資として届けているらしい。(ガイドさんは、二年ほど前に日本から来たというかわいなお嬢さんでした)午後からは、アンコール・ワットの見学である。玄関を出るなりスコールにみまわれ、まるでバケ

ツをひっくり返したような降り方であるが、十分もたたないうちにカラリと晴れるから不思議である。

今日のガイドは現地の少年である。日本語もただどしく半分しか聞き取れない。

例によって民家のない荒野を過ぎるとアンコール・ワットに着いた。門を入ると眼前にアンコール・ワットの全景が広がり、往時のアンコール王朝のけたはずれの偉大さに驚きと壮厳さを感じた。巨大石が敷き詰められた参道の左右には大きな堀がめぐらされ、参道の欄干には蛇をかたどった石彫がヒンズー教の余香を残しているように思えた。大門をくぐり第一回廊・第二回廊と回り、それぞれの城壁には宗教的彫刻がびっしりである。回廊と回廊の間には広い沐浴場も見られた。

威圧感さえ覚える巨大な石の建物内は、外界よりも涼しい空気が漂っていた。

見学を終えてバスに乗りうると、バスの周囲には小学生くらいの小さな子ども達がそれぞれお土産を持って「一ドル一ドル」と言いながら寄ってくる。赤ちゃんを抱っこしてやせ衰えた少女には、何か買ってあげたい気持ちも起きたが、立ち止まると大勢の子ども達がわんさと来るので「ごめんなさい」というような気持ちで逃げるようにしてバスに乗った。

窓から外を見ると、ある少女が藤谷団長の側に駆け寄り何かしきりに話している。とうとう団長は、何か買われたらしい。彼女はニコッと笑った。その笑顔の美しかったこと、喜びを顔全体で現していた少女は輝いた瞳で、先生をバスまで見送り最後まで手を振っていた。プノンバケンの丘での夕日観賞は天候のかげんで実現できなかったが、象に乗って丘の上に登ったのは一生の思い出になった。

アンコールトム・アンコール遺跡の周辺石造の遺跡郡が遠々と続く。あちらも、こちらも遺跡ばかりである。アンコールトムとは、大きな都市ということと説明があった。(アンコールは都市、トムは大きい)なるほどバスで遺跡内を次々と回ったが、その一つひとつに石彫がなされており、王朝時代の文化美術に圧倒される思いである。こちらは、大乘仏教の影響で仏教寺院が多かったようである。最後の見学遺跡は(夕前は聞き漏らした)石の大伽藍に巨木が根を張り、その根の端々がなんと建物を包み込んでいる。そのため傾き崩れ落ちてる建物を目の当たりにし、悠久の時の流れの悲哀を感じずにはいられなかった。

とてつもなく大きな繁栄を誇った王朝の夢の跡を見るにつけ「諸行無常 盛者必衰」を味わせただきアンコール遺跡を後にした。

ちとせふる遺跡の寺を驟雨過ぐ

藤 本 和 人

このたびの旅行で一番印象に残るのは、アンコールワットなどの遺跡でありました。全く知らないわけではなかったが、何しろ初めての現地視察でした。

藤谷代表が「レポートをお願いしたい。俳句でもよい」と言われたとたん、芭蕉の「夏草や つわものどもの 夢のあと」が頭をよぎり、どうしてもこの句の類型が拭いきれない。

バンコクの寺院が近世の華やかなカラーであれば、アンコールのそれは古色蒼然そうぜんのモノクロの廃寺であり、国情も相まって、際立った対比でありましょう。

それにしても半端じゃないこの建造物・彫塑ちゆうそく。千年前、君臨した王のロマンか？ 多くの収奪や苦役・犠牲もさりながら、その造形や技術に驚嘆と同時に、いいようなない感動を覚えました。

これは、世界に分布存在する遺構などに共通する歴史的・文化的・技術的価値が、見るものを通して圧倒させるものでありましょう。

こう思いを巡らしてきて、やっと句のようなものができました。見出しとして文頭に掲げました。



バイヨン（アンコール・トムを中心建物）の説明を熱心に聞く

戦争の悲惨さを痛感

荒 木 邦 枝

今回は、海外視察先であるタイ・バンコク市内の寺院で前門さまの追悼法要に参拝されたこと

は、以前にご一緒させていただき、特に身近に感じさせていただいたせいとか、とても寂しい気持ちを抑えながら遠くの海外寺院からご遺徳を偲しのんだことが、心深く記憶に残っています。

カンボジアでは、アンコール・ワット遺跡のすばらしさに目を見張り、タイムトンネルで時代をさかのぼってきたような錯覚にとらわれそうでした。

しかし、現在のカンボジアはと言えば、空爆や地雷の犠牲となり手足の不自由な人、義手・義足の方々を目の当たりにして、戦争がいかに悲惨で嘆かわしいかということを痛感いたしました。

そんなカンボジアの子ども達の光るような目の輝き、自然の中でたくましく、しっかり自分の力で生きていく姿に心を打たれました。

我々日本人は恵まれ過ぎているのでは。

そんな気持ちや反省など複雑な気持ちで胸がいっぱいになりました。

このたびの視察を終えて、これから先の日本を背負ってたつ子ども達には、カンボジアで見た子ども達のようなあの目の輝きやたくましさを持つるよう育て、育んでいくように益々努力精進の必要を感じました。

お釈迦さまの教えが人を動かし

花 木 肇 正

今回初めて参加させていただき、企画・運営・お世話を賜りました。

会長さんはじめ広報部の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

カンボジアを訪問して、自然銀行での木のない所へは苗木を育てて植樹に行き、魚を育てて池や川へ放流など、世界各地より民族を越えて若い人びとによるボランティア活動の話を聞き、頭の下がることばかりでした。

今もなお、地雷による被害を多くの人が受けておられる様子を目の当たりに見て、どうしようもない感じがしました。

車いすも体型に合わせて三輪車に改造、タイヤも日本で戦後万年タイヤの自転車があったように道路も舗装していない所も多いし、道路も悪いので空気タイヤでは修理も不可能であり、万年タイヤを使用されていることに気が付きました。

善意で日本人からの四輪の車いすも労力とお金を掛けて寄贈されているが、利用されていないのが多く山積みになっている。

日本の感覚で、現地ではどんなものが必要なの

か調査もしないで行われている行為に一考が必要だと思いました。

アンコール・ワット（世界遺産）では、海外からの見学者も多くなることが見込んでホテル建設が盛んに行われていた。

アンコール・ワットを視察してお釈迦さまの教えが人を動かして石積みによってできている、大がかりに教法の絶大さに感慨無量なものを覚えた。

ユネスコを通じて日本の技術者も参加して復興に協力されていることも伺えた。

観光バスに子ども達が群がる所もあり、物を売りに来る。安いのか高いのか想像もつかない。

平日だったと思うが学校教育より生活が大事な家庭もあるのではと思う。

警察手帳でさえ観光客に売りにくる、警官本人である。

特産物マーケットへも顔を出したが、少し怖いような気がした。

タイ王朝の国バンコクへは三、四回来ているが、今回エメラルド寺院には多くの修学旅行生や観光客で賑やかだった。

宿泊は良いホテルであったし、NHKの衛星放送も見られ、日本のニュースや天気予報も知られて良かった。

全行程を終え、自然・人間能力との調和・仏の教えのすばらしさに、初心に帰り感激の連続でした。



タ・プロム（アンコール・ワット遺跡）にてー左側イチジクの根ー

二〇〇二(平成十四)年度 事業報告

七月十五日(月)～七月十九日(金)

第十回 海外視察

視察先 カンボジア・タイ

二〇〇二(平成十四)年

四月 十七日(水)
会計監査

四月 二十三日(火)
世話人会(第一回)

五月 二十四日(金)
世話人会(第二回)

五月 二十四日(金)
二〇〇二(平成十四)年度

総会

記念講演

講師 吉澤 健吉

(京都新聞社文化報道部情報担当部長)

講題 「現代社会と伝統仏教の課題」

懇親会

会場 左阿彌(東山区円山公園内)

二〇〇三(平成十五)年

一月 十四日(火)
世話人会(第三回)

会 員 動 静

〈退会会員〉

衛藤 龍天 前久住町長
大分・岡・安照寺住職

十月七日付、当人より任期満了にともなう辞任のため、退会の申し出がございました。

龍谷顕真会事務局より

第二十三代宗主勝如上人ご葬儀
ご香儀・供花懇志

会員の皆様からお預かりしましたご香資を次の通りご進納いたしましたので報告いたします。

ご香儀 二〇〇、〇〇〇円
供花懇志 二〇、〇〇〇円

会費・特別会費納入のご依頼

年会費 五、〇〇〇円
特別会費 一〇、〇〇〇円(当選年次)

会費・特別会費未納の方は、事務局までご連絡の上ご納入くださいますようお願いいたします。ご不明の点がございましたら事務局までご連絡ください。

会員加入促進のご依頼

地方自治体の首長・議員に公選された宗派の僧侶の方で、本会に未加入の方をご存じでしたら、加入ご推奨いただくとともに、事務局までご連絡ください。

公職選挙宗門推薦について

今後、選挙の施行があり、立候補を予定されている方は、宗門推薦をいたしますので、事務局までご連絡ください。

総局部門宗務組織変更について

二〇〇三(平成十五)年度から、総局部門宗務組織が変更となります。これに伴い、4月1日より当会事務所が「広報部」から「総局公室(渉外・広報担当)」と変更になりますので、ご連絡いたします。